



暮らしの風景

岩見沢駅、まちを 触発する自由通路

【北海道岩見沢市】

鉄道のまち、岩見沢。
ガラス張りの南北自由通路は、
駅の南北をつなぐだけではない。
ここにしかない特別な場所として
さまざまにまちを触発する。

文——大森晃彦 Akihiko Omori
絵——佐々木悟郎 Goro Sasaki

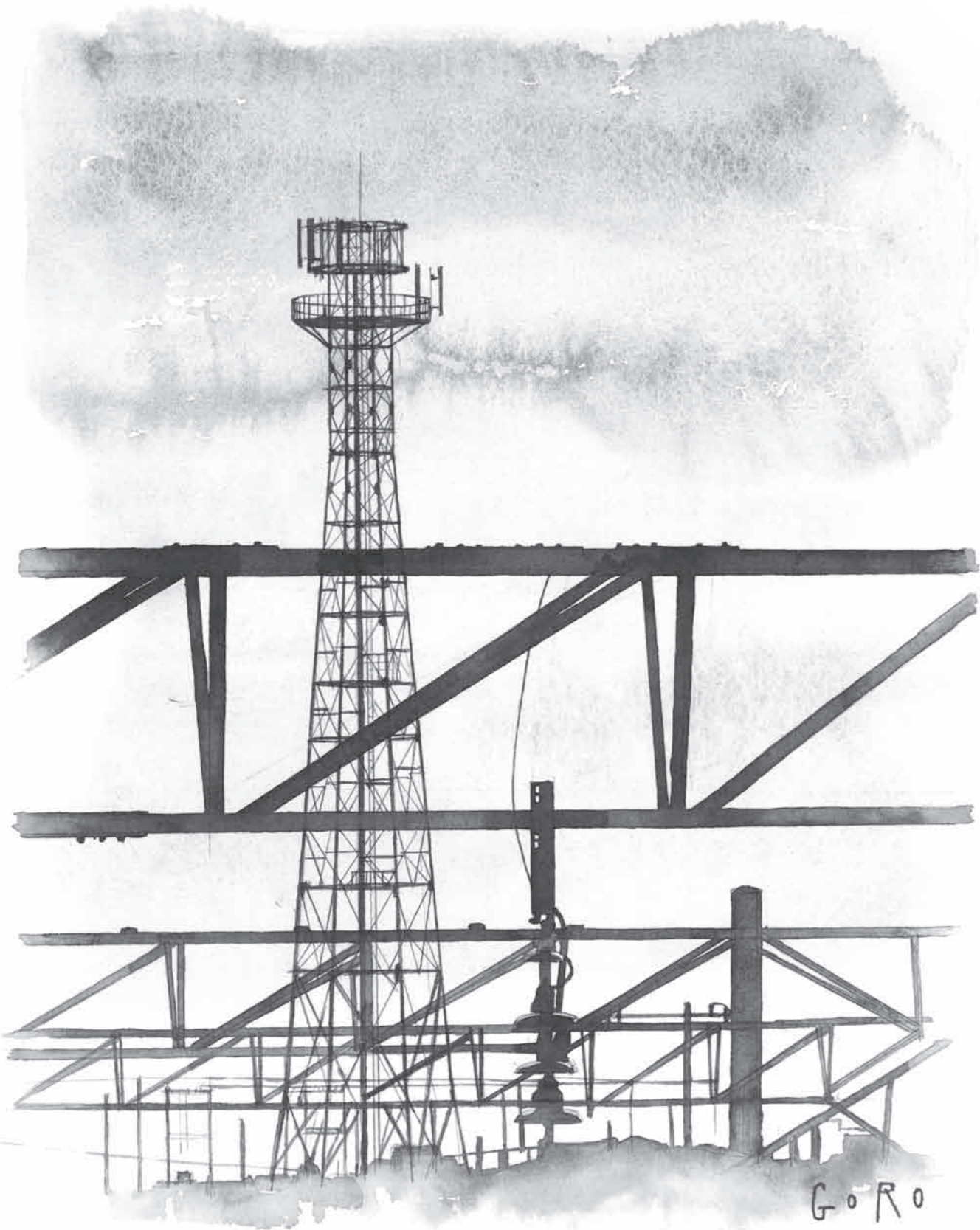


都市のグリッド
北海道の都市は碁盤の目の街区が多い。たとえ京都に做ったといわれている札幌。ただ京都というには都市のグリッドが方位と微妙にずれているのが気にかかる（もつと気になるのは川が南から北へ流れていることだが）。調べてみると、それもそのはず、どうやらグリッドの基準となるのは方位ではなく水運と灌漑のための運河で、それが南から北にやや西に振られて流れているから、らしい。碁盤の目ではあるけれど、条坊制の古代都市に遡る京都や奈良とは成り立ちがまるで違うのだ。

同じく碁盤の目の街区をもつ岩見沢は、札幌から約四〇キロ、旭川から約八〇キロの、石狩川の流域である空知地方に位置する。岩見沢の都市グリッドの基準は線路だ。南西から北東へ一直線に伸びる線路（函館本線）。その南（南東）側に広がる碁盤の目の街区は、方位とは無関係に軌道の軸線とぴったり合っている。

線路に平行に駅前を走るのが一条通り。三筋下って四条通りが旧国道二二号線（札幌〜旭川）。七条通りあたりまで東西軸が明快だ。そこに直交する通りが「丁目」のブロックをつくる。

岩見沢駅南北自由通路から見た構内の夕焼け。遮る山がなく地平線に夕日が沈む空知地方独特の風景だ。夕日に骨組みを透かす鉄塔はさながら、岩見沢スカイツリー。



暮らしの風景



岩見沢駅から南にまっすぐ伸びる「駅前通り」ではなくて、少し東の「中央通り」が起点となって、東西に丁目が振られている。なぜ駅前通りが基準軸ではないのかというと、それは単純な話、駅が移動したのである。一八八五年（明治十八年）の初代駅舎は中央通りのところであり、一八九二年（明治二十五年）に現在の場所に移転している。以来、駅前通りは住所表示こそ違えど、まちの主軸線となっている。

まちの遺産を掘り起こす架け橋

二〇〇〇年十二月のこと、一九三三年（昭和八年）に完成し、永らく市民に親しまれてきた三代目の木造駅舎が漏電による火災で焼失した。現在の駅舎は、その後行われた公募型建築デザインコンペに基づき、二〇〇九年に岩見沢複合駅舎（「JR岩見沢駅舎」、岩見沢市の施設である「有明交流プラザ」、駅の南北をつなぐ橋とふたつの昇降棟からなる南北自由通路「有明連絡歩道」の複合）として竣工したものである。設計者は株式会社ワークヴィジョンを主宰する西村浩さん。岩見沢複合駅舎のデザインは高く評価され、グッドデザイン賞大賞、BCS賞、日本建築学会賞、鉄道関連デザイン賞の国際コンペティション「ブルネル賞」をはじめとするさ

まざまな賞を受賞している。

各賞の評価は主に「顔」である駅舎+交流プラザに向けられている。だが、ここではその背後の軌道を跨ぐ南北自由通路に注目したい。この床から天井までガラス張りの橋が、まちにとってとても大切なものを掘り起こしているからだ。

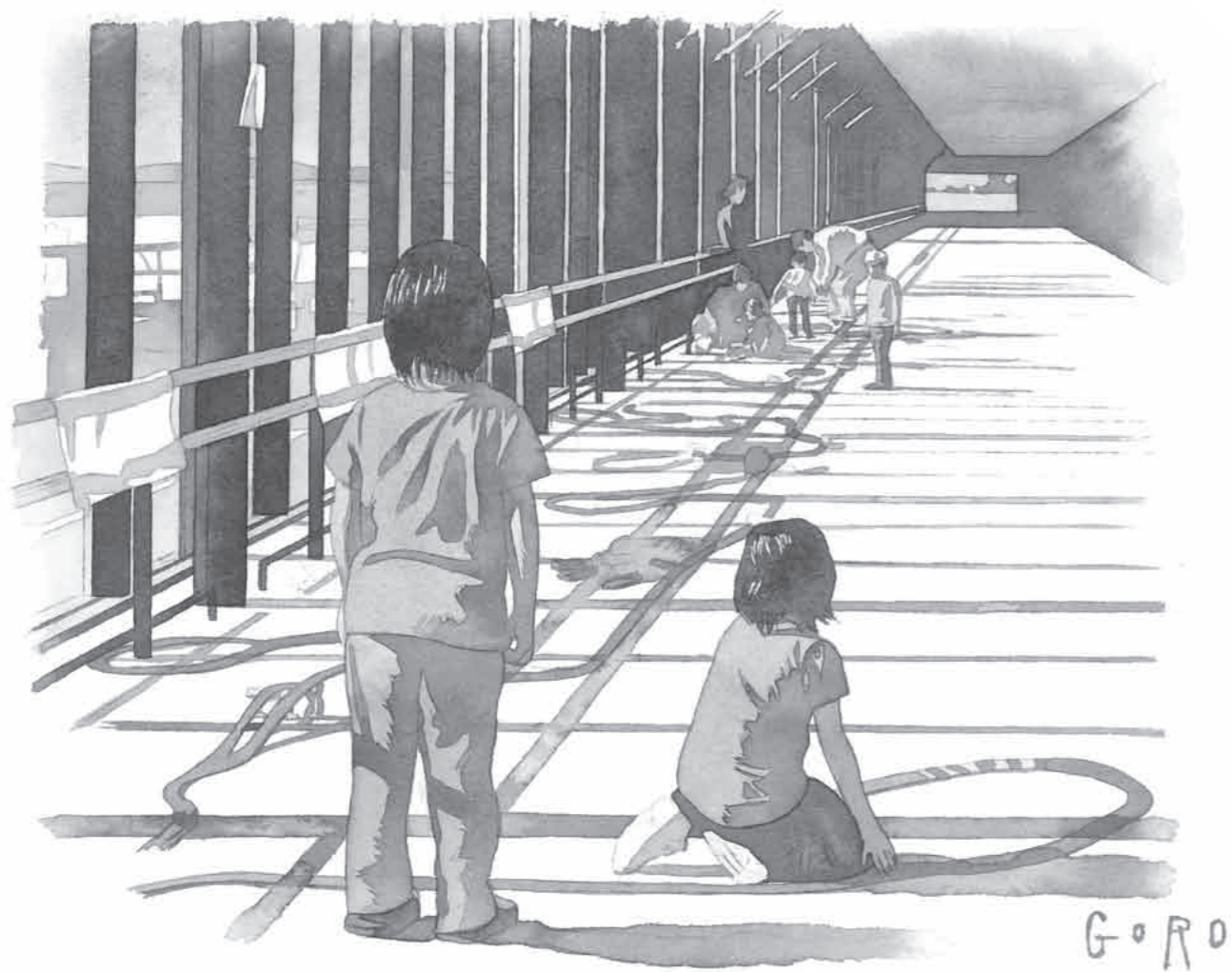
岩見沢駅は、北海道内最古の鉄道の、主要駅として開業した古い歴史を持ち、戦後には、高度成長期に増大した貨物輸送量を支えた一大車両基地があった。北西側の敷地にある岩見沢運転所は、かつては岩見沢機関区と呼ばれ、多くの蒸気機関車が配置されていた。機関車がいなくなった今も、南北自由通路の西側には多くの線路の痕跡と、使われなくなった転車台（ターントーブル）が残されている。自由通路の北側には、赤れんがの明治建築「JR岩見沢レールセンター」がある。妻壁に開拓使のマーク、五芒星を掲げた風格のある現役の工場建築だ。

いずれも岩見沢の歴史を伝える重要な遺構なのだが、かつてはまちの人から遠く隔てられ、鉄道関係者しか近づくことがなかった。鉄道と共に生きてきたまちなのである。それが今、南北自由通路のおかげで見ることができるようになったのだ。まちの資産を身近に感じられること。それは設計者によって綿密に仕組まれた、まちづくりのための仕掛けなのだ。

「鉄道のまち」のまちづくりの方向性

二〇一一年九月に、友人の写真家、小川重雄さんから、岩見沢駅を撮影した写真を同じ岩見沢駅で展示するという大胆不敵な写真展をやります、とのお誘いがあった。訪れてみると、奇しくも駅舎正面二階にあるセンターホールでは「鉄道お宝自慢」が開催中。岩見沢には多くの鉄道OBが住み続けていて、「お宝」はもちろんのこと、機関区にまつわるさまざまな記憶が息づいている。蒸気機関車の動輪の青図を示しながら、熱く語る老人の姿があった。南北自由通路では、子どもたちが秋の日を浴びてプラレールの線路を敷設中。いずれもまちづくりのイベントのプログラムで、まちを知り、愛着をもってもらおうこと、そして、まちの魅力に惹かれてやって来た人びととの交流が狙いだ。

南北自由通路から眺める夕暮れの風景は格別だ。地平線に沈む間際の秋の柔らかな夕日がほぼ水平に差し込み、さまざまな鉄道の遺構や記憶のある、ここにしかない場所を演出してくれる。夕日に繊細な構造が透ける鉄塔を、密かに「岩見沢スカイツリー」と名付けてみた。



2011年9月、南北自由通路で開催されたイベント「みんなのばせ!! 100mのプラレール鉄道」。駅を発着する列車を眺めながら、ちびっ子鉄道ファンがプラレールをつないでいく。

おおもりのあきこ ● 建築ジャーナリスト。一九五五年、東京生まれ。一九七八年早稲田大学建築学科卒。一九八〇年同大学院修了後、新建築社入社。新建築編集長ほかを歴任。二〇一〇年建築メディア研究所を設立。